

35. MSA(Multiple System Atrophy)に対する理学療法について

奈良県立医科大学附属病院リハビリテーション部
天野三郎
奈良県立医科大学神経内科
寺本 純 榊原敏正 真野行生

〔目的〕 Multiple System Atrophy (以下MSA)は、パーキンソン症状・小脳症状・錐体路徴候・自律神経症状などの多彩な臨床症状を呈する疾患群で、近年の話題の一つになっている。これらの症例では、障害部位が広汎であり、従来と同じ概念のもとで理学療法を行なっても十分な効果が得られない場合が多い。MSAは医学的にも未解決の点が多く、治療法も確立していない。その意味でも、理学療法上の工夫が必要となる。そこで我々は理学療法的側面より検討を加えた。

〔対象および方法〕 対象は6例(男性2例・女性4例)のMSA患者で、平均年齢は58.5歳で、平均罹病期間は4年である。いずれの症例も主要な症状は歩行障害である。

これら6例の症例に対して、①Proprioceptive Neuromuscular Facilitation(以下PNF)法、特にRhythmic Stabilization法 ②おもり負荷法 ③弾力帯装着法 ④筋力増強法の4点を施行し、その効果について検討した。効果の評価に対しては、イ)改善の程度・ロ)効果の持続・ハ)病勢の進行との対応などについて考察した。

〔結果および考察〕

PNF・おもり負荷法・弾力帯装着法では、バランスおよび歩行パターンに効果を認めた。筋力増強法では、著明な効果はなかった。全体として症状の進行につれて、機能低下の傾向がみられた。自律神経症状の著明な症例では、起立が困難であり、理学療法上の問題を残した。

現状としては、MSAはリハビリテーションに多くを期待しているが、症状に応じて適切な理学療法をすることが患者のADL能力の向上に必要と考えられる。現段階では、個々の症例でさまざまな問題を含んでいるが、MSAのような複雑な変性疾患に対して有効な理学療法を確立していくことが必要と考える。

36. スモン後遺症の基本的動作について —臨床所見との対比—

奈良県立医科大学附属病院
天野三郎 真野行生(M.D.)
鹿野園病院
北岡俊二
奈良県立奈良病院
門脇明仁
東大寺整肢園
安間 治
平井病院
川村邦男

〔目的〕 スモンは、発病後すでに15年以上を経過し、一般的に解決されたと思われている。その後の経過に目をむけた検討は、きわめて乏しい。今回われわれは、スモン患者60例について、日常生活動作(以下ADL)・筋力テスト(以下M.M.T.)および神経症状を検索し、その現状を調査した。

〔対象および方法〕 対象は、奈良県下におけるスモン患者60例(男性23例・女性37例)で、受診時平均年齢は61.6歳である。平均罹病期間は15年である。これらの全例に対して、医師による神経学的検査を行なうとともに、理学療法士によるM.M.T.および基本的動作の評価を行った。

M.M.T.は、一般的にスモンは、上肢の筋力が障害されないということに注目し、上腕二頭筋のM.M.T.を患者が協力的であるか否かの判断とした。それを確認した上で、下肢で比較的障害が著しいとされている股関節屈曲・伸展・外転、足関節背屈・底屈のM.M.T.を行った。ダニエルの0～5段階にて評価した。

〔結果および考察〕

M.M.T.の良い症例の中にも、基本的動作の膝立ちから階段昇降まで、部分介助あるいは不能の症例がかなりみられた。深部知覚障害は、基本的動作に影響を与えていると推定される。日常生活上の工夫や設備の改善がADLを高めていると考えられる。

残存能力を最大限に発揮させて、自立性を高め、家庭での有意義な生活が送れるようなアプローチが必要であり、この点を考える上で今回の調査は有益なことである。